

トリック

～アートの中の真実～

1839年、フランスのダゲールによって写真機が発明され、このダゲレオタイプの写真を足がかりとして銀塩写真記録法が普及していきました。この大発明は、それまで実像を忠実に描き出すことが求められてきた絵画の世界に大きな混乱をもたらしました。つまり、絵画不要論といったものであり、実際に、肖像画など実像を正確に描くことで生計を立てていた画家の多くが職を失うことになりました。そうした騒動の中で、画家のアンゲルがフランス政府に写真を禁止せよと要求したことは有名な話です。一方で、写真技術の普及により、画家は写真のように絵を描く必要が無くなり、モネの「印象」に代表される新しいアートが生まれ、それが印象派の誕生につながりました。

こののち、写真は実像の正確な描写の方向へ、そして絵画はその逆へと向かって行ったのでしょうか。両者は、両者の活動領域で並立して共存していったのでしょうか。不敵なアーティストたちがそのようにおとなしくしているはずはありません。現実には、写真が修整できるように、実像の正確な描写という問題が、より一層複雑さを増していったように思えます。鑑賞者である私たちが見る写真や絵画。私たちは実際に目にするそれらの画像を、一度疑ってみる必要があります。アーティストたちが仕掛けた「トリック」を見つけ出し、真実を探してみましょ。そして、展覧会を出て、日常あたりまえに目にするものに対しても、「トリック」をあばいてみませんか。

フォーエバー現代美術館
チーフキュレーター 加藤 惇